



Title	松山博士を偲ぶ
Author(s)	西田, 利八
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 31-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

松山博士を偲ぶ

西田利八

一、眞の教育者。

松山先生が廣島高等師範に御在職中、時の高師校長幣原先生が松山先生を賞讃された評語『教育者らしき眞の教育者。』といふ語は、當時高師に居つた人々の耳朶に残つてゐることと思ふ。松山先生の全生涯、全人格は此の一言に最もよく表はされてゐる。

諄々として教へて倦むことを知らなかつた御態度、謹嚴以つて身を持して、いさゝかも節を紊さなかつた御生涯、子弟の向上發展の爲には病軀をも押して御世話下さつた御心情等數へ挙げれば際限がないが、先生の此の『教育者らしき眞の教育者』と評せられた立派な御人格に薰陶され育成されて『人』となり『教育者』となり得た人々の數は前後數千に上ることと思ふ。

生得缺点を多く持つた私などが、今日教育に携はつて大過なく日を消して行けるのは、實に先生の此の御人格に負ふ所が多いのを痛感する次第である。

二、電光影裏斬春風。

先生が盲腸炎を病んで大手術を受け、漸く快方に向つて歸宅された直後、御見舞に參上した私は、先生の室に『電光影裏斬春風』と横書にした額が懸つて居るのに目がついた。先生は其の額に見入つて居た私に『今度の大手術には此の語を念誦してゐたので餘り苦痛を覺えなかつた。』と聞かして下さつた。

其の時から私は層一層先生のお徳が慕はしくなつて、何事にまれ先生に縋つて御指導御鞭撻を仰いだのであつた。あの寛容な御度量、あの慎重な御熟慮、あの果斷な御處置、あの物に動じない御膽力等は決して偶然に修養し得られたものでないことを私が知り得たのも此の時であつた。

三、不覺の涙。

先生が廣島高師を辞任されて、大阪市の懷徳堂に赴かれるといふ評判が私の耳に入つた即日、私は勤務先の附屬中學校から私宅にも歸らず先生のお宅に推參して其の眞疑を確めた。

其の時、あの重い先生の唇から評判は遂に評判だけに止まらないことを伺つて、私は不覺にも涙を落してしまつた。常日頃先生に頼つて指導も受け、修養もしようと思つてもたれきつて居た私にとつては、最も悲しい晴天の霹靂であつたからである。否々唯無暗に悲しかつたのである。この涙が女々しいものであつたかどうか、未だに私にはわからぬ。しかし先生がお叱り下さらなかつたことは、今

に嬉しい記憶の一つになつて私の腦裏に仕舞込まれている。

四、聊齋志異。

愈々先生が大阪市にお引越される當時、私は日曜日一日、先生の書物の荷造りのお手傳に上つた。雑誌の種々の中に、聊齋志異を圖書館本である事を申した處、先生は箱に入れてしまつた中から探し出して來て私に『繪圖聊齋志異』を下さつた。

『別れても勉強せよ。』とて記念に下さつたものであることは知れきつた事である。嗚呼。然し、私は何と申して先生にお詫びしたらよいことか、先生が期待して下さつた百分の一も勉強できて居ないのである。そして年は不惑に近づかうとしてゐるのである。噫々。噫々。

五、悲しき吉報。

大阪の新聞は、一様に先生の訃を報ずると共に間もなく先生が文學博士の榮冠を得られたことを報じた。何たる悲しき吉報ぞ。

さもあらばあれ、一生涯を學問と育英に投ぜられた先生は、幾多の有爲な教育者や、幾多の有爲な人士を養成した上に、築き上げた學問は世に認められて、學者としての榮爵を授けられたのである。先生は今や泉下で安らかに眠り給うておはすであらう。

六、先生の令夫人。

御病氣勝で後半生を送られた先生を思ひ偲ぶと共に、先生の令夫人の御苦勞が思はれてならない。先生が病まれて數年間令夫人が髪を人並に結はれたことを知らなかつた。以て令夫人が萬事を忘れて先生の御看護に當られたことを察すべきである。先生が御病弱の御身をもつて榮ある博士號を得られる迄には涙なしには聞けぬ話の數々が令夫人についてあることと思ふが、此の數年間全くお宅の方へは訪問致さなかつた私は、伺ふ機會もなかつた。何時か又訪れて備に承はつて次の機會に筆にしたいと念じてゐる。

先生の冥福を祈ると共に、令夫人の御自愛を祈つて擲筆する。

松山先生の講演を回想して

大阪工廠長 三 輪 時 雄

工廠職員一同の爲に儒教に關するお話を松山先生にお願いしたところ、快諾を得て愈々大正十四年十一月十三日に工廠内講堂に於て實施さるゝことゝなつた、表題は『儒教々義一斑』であつて極めて謹嚴なる態度を以て諄々として講演さるゝこと約二時間に及んだ、先づ『儒教』の定義より説き起して其